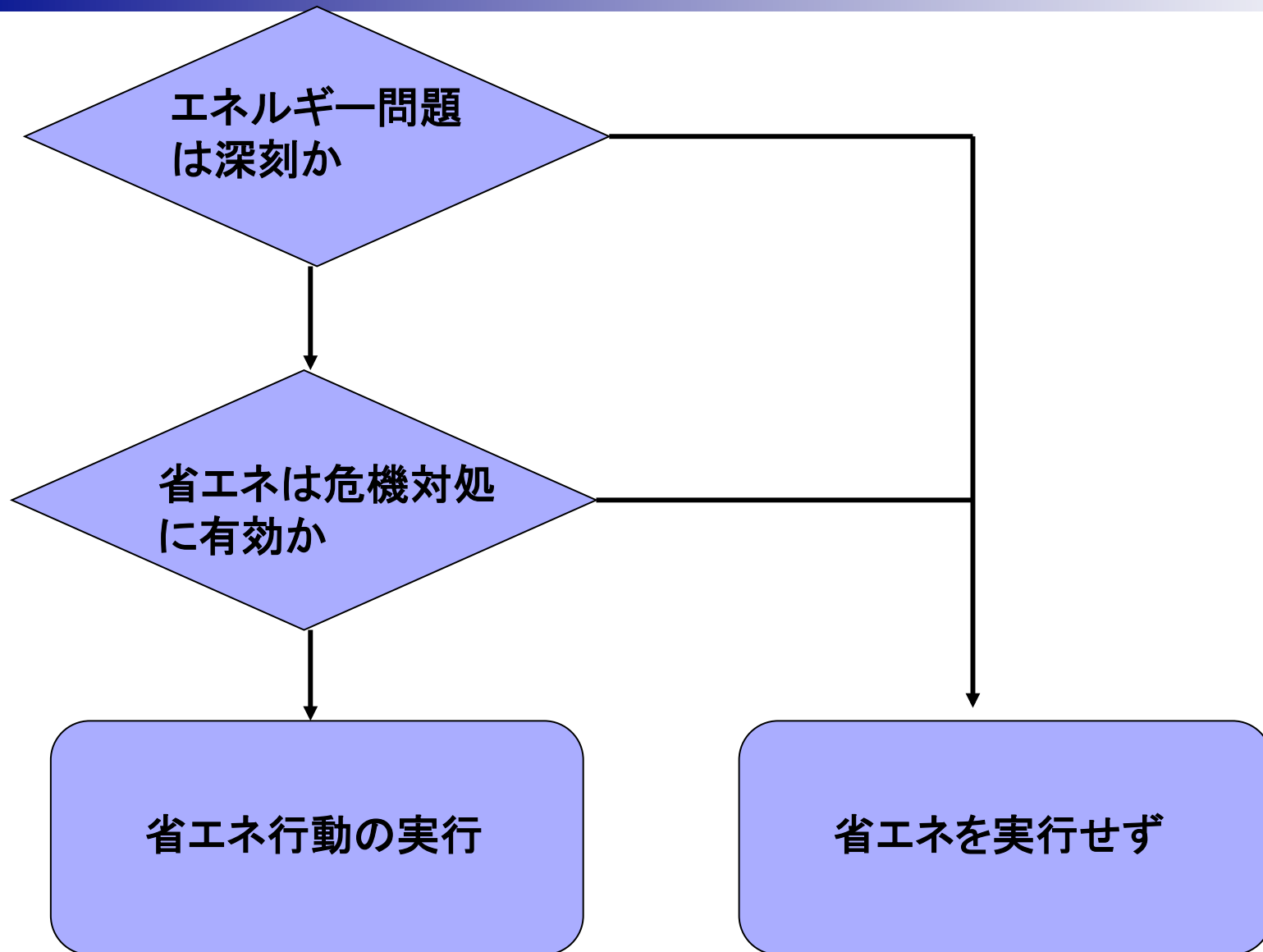


環境配慮の態度と行動


環境に関する行動はなぜ食い違うのか？

環境配慮の意識と行動が食い違うのは

- 環境・社会のためという意識と生活・自分のための行動のジレンマ
(自分一人くらい、自分だけやっても)
- 消費の場面では環境の意識は浮びにくい
(ついつい……しがち、うっかり……した)
- 消費行動をとる時に注目されているのは、
行動のもたらす結果
(快適だから、便利だから、安価だから、
みんなもしてるから)



Honold & Nelson(1979) の危機対応モデル



Honold & Nelson(1979) の危機対処モデル

- 危機対処の葛藤理論 (Janis & Mann, 1977) をエネルギー危機事態に適用
- 危機認知と対処の有効性認知が対処行動の主要な要因
- 渇水時における節水行動を説明するモデル

汚染の深刻さの認知

汚染に対する責任感

ゴミは燃やすべきでない
との個人的規範の喚起

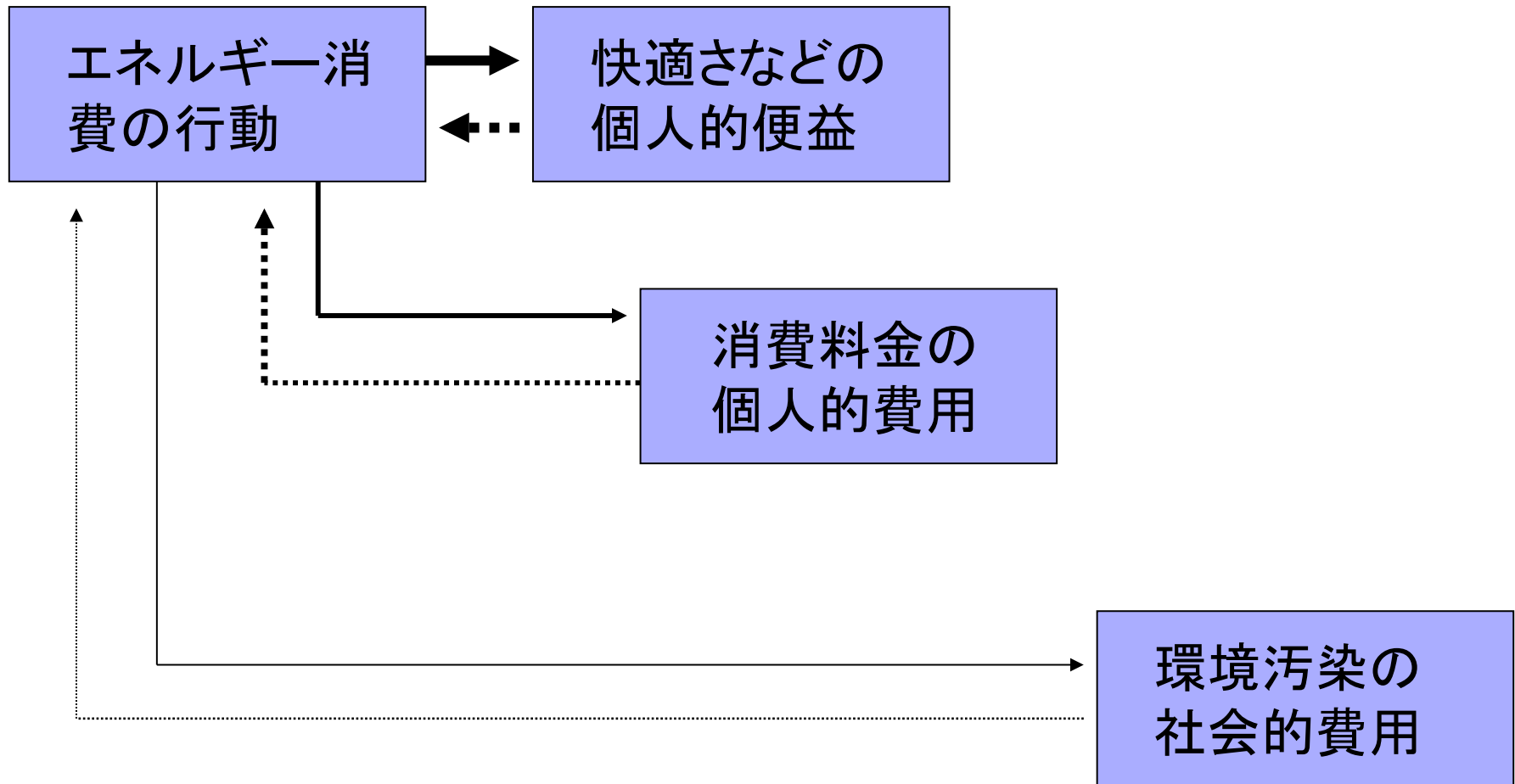
ゴミ焼き行動の自粛

Van Liere & Dunlop(1978)の規範喚起モデル



Van Liere & Dunlop(1978)の規範 喚起モデル

- Schwartz(1977)モデルを庭先でのごみ焼却
自粛行動に適用
- 近隣環境(においや煙の迷惑)を汚染すべき
でないとの個人的規範の喚起が行動の条件
- 汚染の深刻さの認識と自分の行動による汚
染への責任感の認識が個人的規範を喚起



McClelland & Canter(1981) の社会的トラップモデル



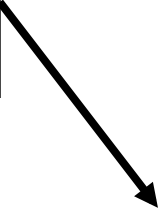
McClelland & Canter(1981) の社会的トラップモデル

- 社会的トラップ: 短期的な個人利益と長期的な社会利益のジレンマ
- エネルギー消費行動の強化因子としての個人的便益・費用と社会的費用
- 行動の直後に生じる個人的便益が消費行動の主要な規定因

消費の便益費用
の認知的評価



消費行動に
対する態度

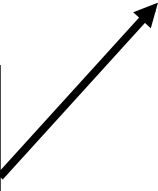


消費行動の
行動意図

準拠者からの
社会的期待



消費行動に
対する規範意識



Seligman & Ferigan(1990)の態度・規範モデル

Seligman & Ferigan(1990)の態度・規範モデル

- Fishbein & Ajzenの合理的行為理論を消費行動に適用
- 行動の直接の規定因は行動意図
- 具体的行動の態度と主観的規範が行動意図の規定因
- 態度は行動の主要な結果の期待度と重要性の積和
- 主観的規範(個人的規範でなく, 個人が意識した他者からの期待としての社会規範)
- 主観的規範は重要な他者の期待と期待に従う動機づけの積和



従来のモデルの位置づけ

- 目標意図の説明モデル: 環境保全型行動を促進する要因を重視
 - 危機対処モデル
 - 規範喚起モデル
- 行動意図の説明モデル: 環境保全型行動を阻害する要因を重視
 - 社会的トラップモデル
 - 態度・規範モデル



環境配慮行動を妨げる要因

- 環境認知の想起可能性: 行動場面で環境配慮の態度(目標意図)を想起することの困難さ
- 環境問題の社会的ジレンマ構造: 環境汚染型でなく、環境保全型の行動選択の困難さ
- 行動実行の阻害因: 具体的な環境保全型行動の実行にともなう困難さ
- 以上の3つの要因を考慮したうえで環境配慮行動の意思決定プロセスを仮定する

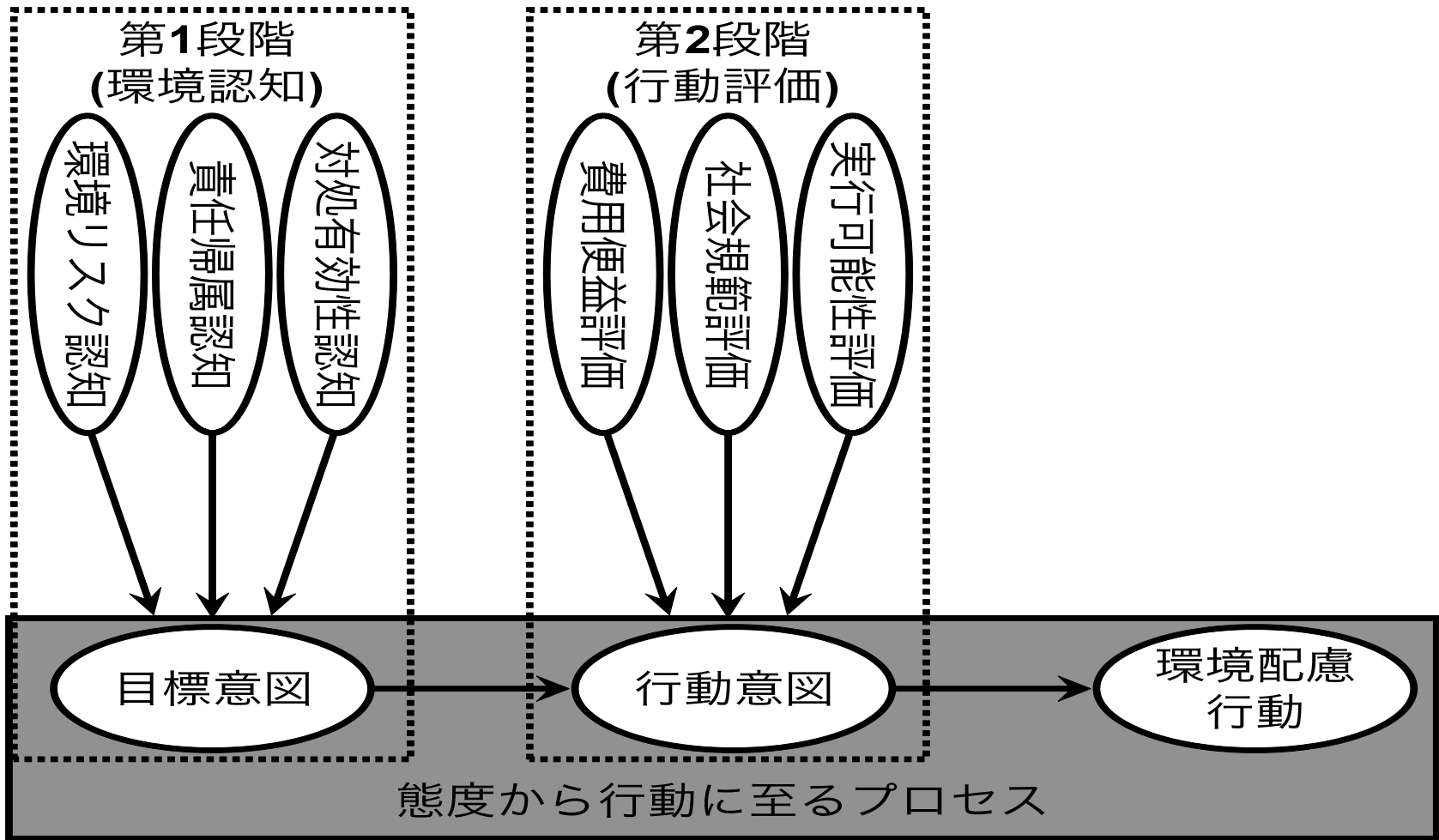




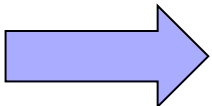
図4-3 広瀬(1994)の環境配慮行動の2段階モデル

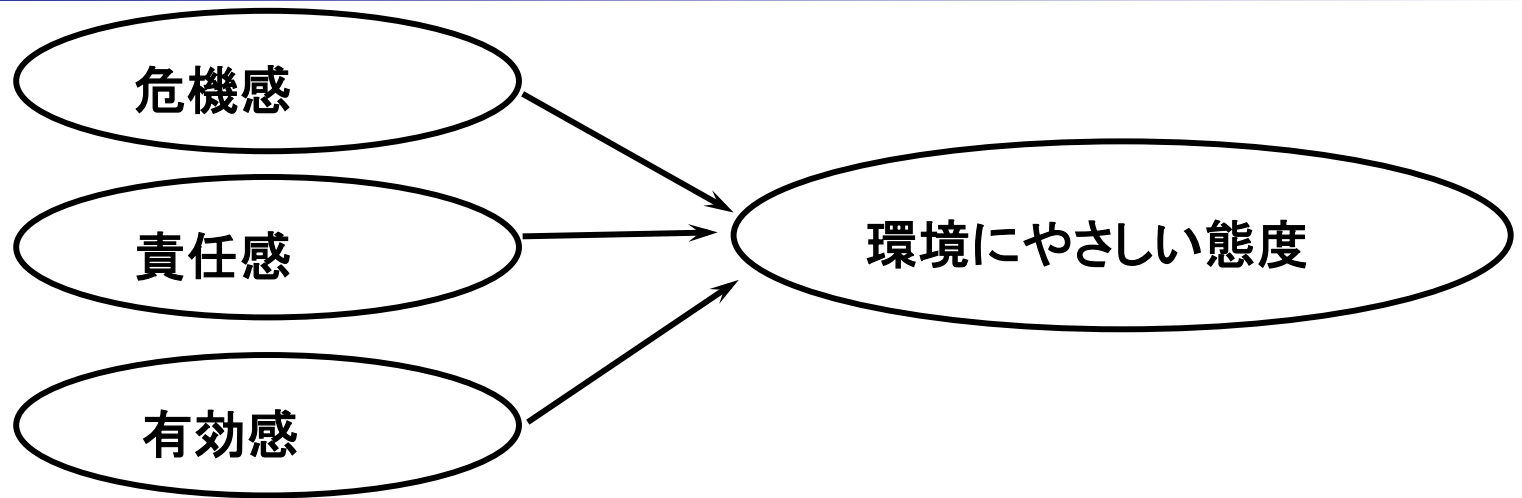


環境配慮行動の2段階モデル

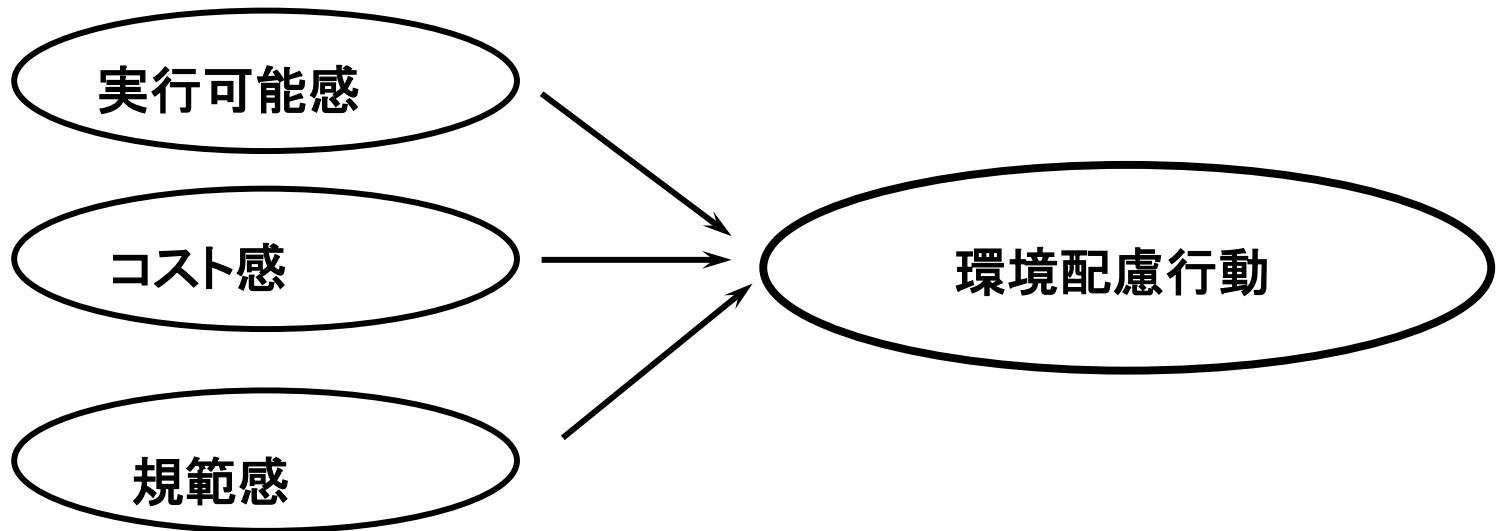
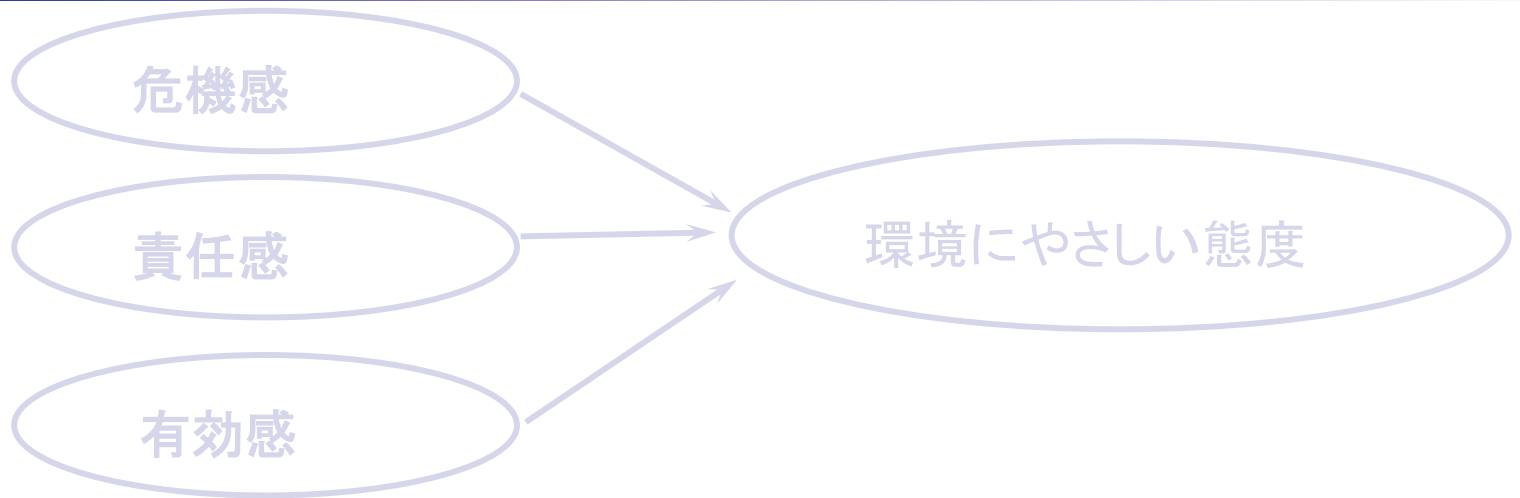
- 環境にやさしくしたい, 環境保全に貢献したいとの一般的な態度(目標意図)の形成の段階
- 具体的行動の場面で自分の態度に一致した行動を実行するかどうかを決定する段階
- 2つの段階は独立しており, かつ各段階で影響をおよぼす要因はそれぞれ異なる

- 
- 
- なぜ、環境配慮行動をとったり、とらなかつたりするのか？

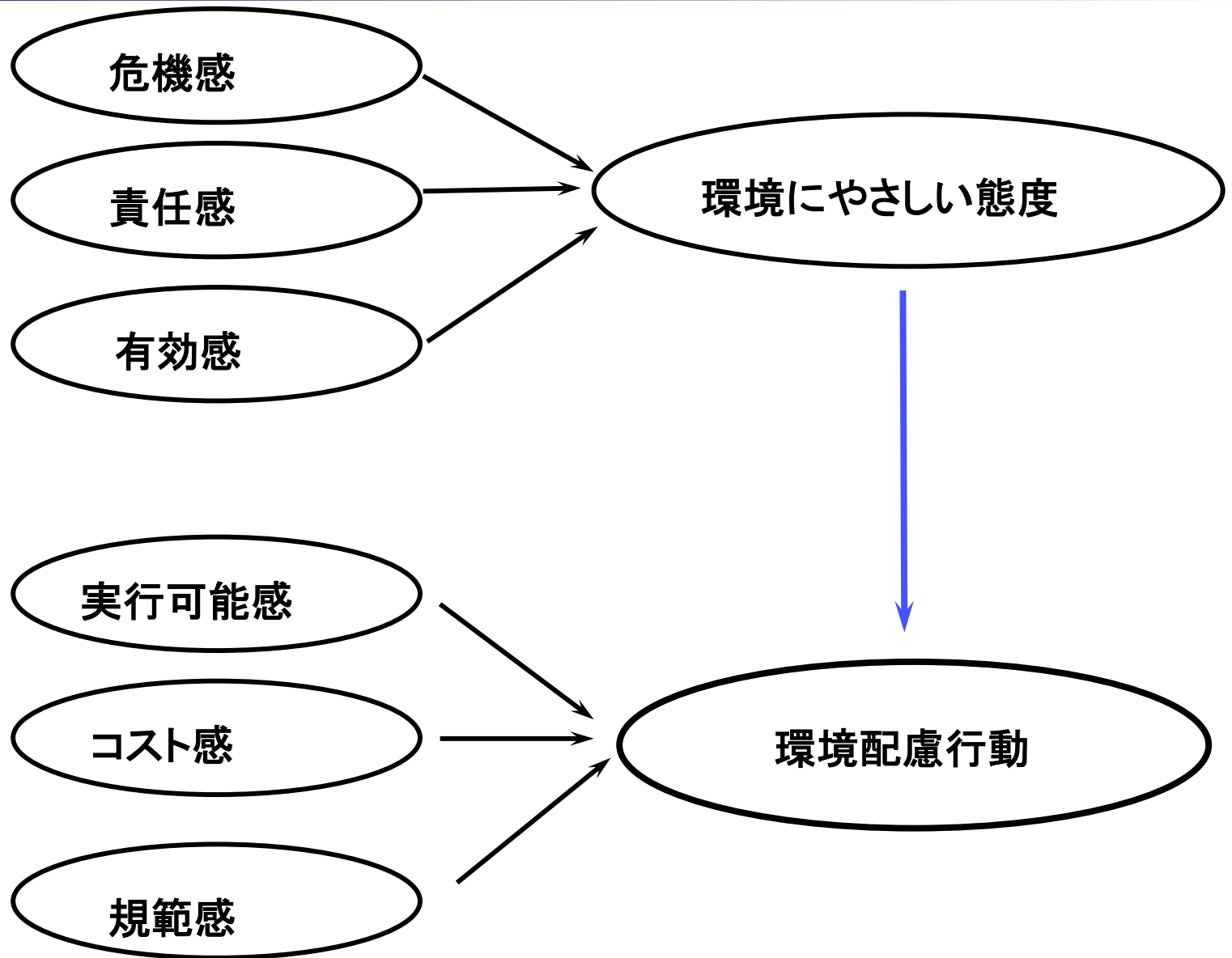
環境配慮行動の2段階モデルから
考えてみよう 




環境にやさしい態度を意識するために考慮される
ことは？



環境配慮行動をとる時に考慮されることは？



環境配慮行動をとるまでに2段階のプロセスがある



環境配慮のライフスタイルとしての目標意図の規定因

- 環境の危機認知（環境汚染は深刻だとの認識）
- 環境問題の責任帰属認知（環境汚染の責任は自分にあるとの認識）
- 環境問題の対処有効性認知（自分が何らかの行動をとると効果があるとの認識）



環境保全型の行動意図の規定因

- 実行可能性の評価（個別の配慮行動をとるために必要な知識や技能をもっているか）
- 便益費用の評価（個別の配慮行動によってどのような便益や費用が生じるのか）
- 社会規範の評価（自分にとって重要な他者は配慮行動をとることを期待しているのか）



環境問題についての意思決定の特徴

- 目標意図をもつ時点と行動意図を決定実行する時点が不一致
- 一つの一般的な目標意図とそれに関連する複数の個別行動についての行動意図の水準の違い
- 消費の副次的目標としての環境配慮的目標意図の位置づけ(主要な目標は消費による便益)
- 個別の配慮行動の実行によっても明確なゴール達成とはなりにくい目標意図

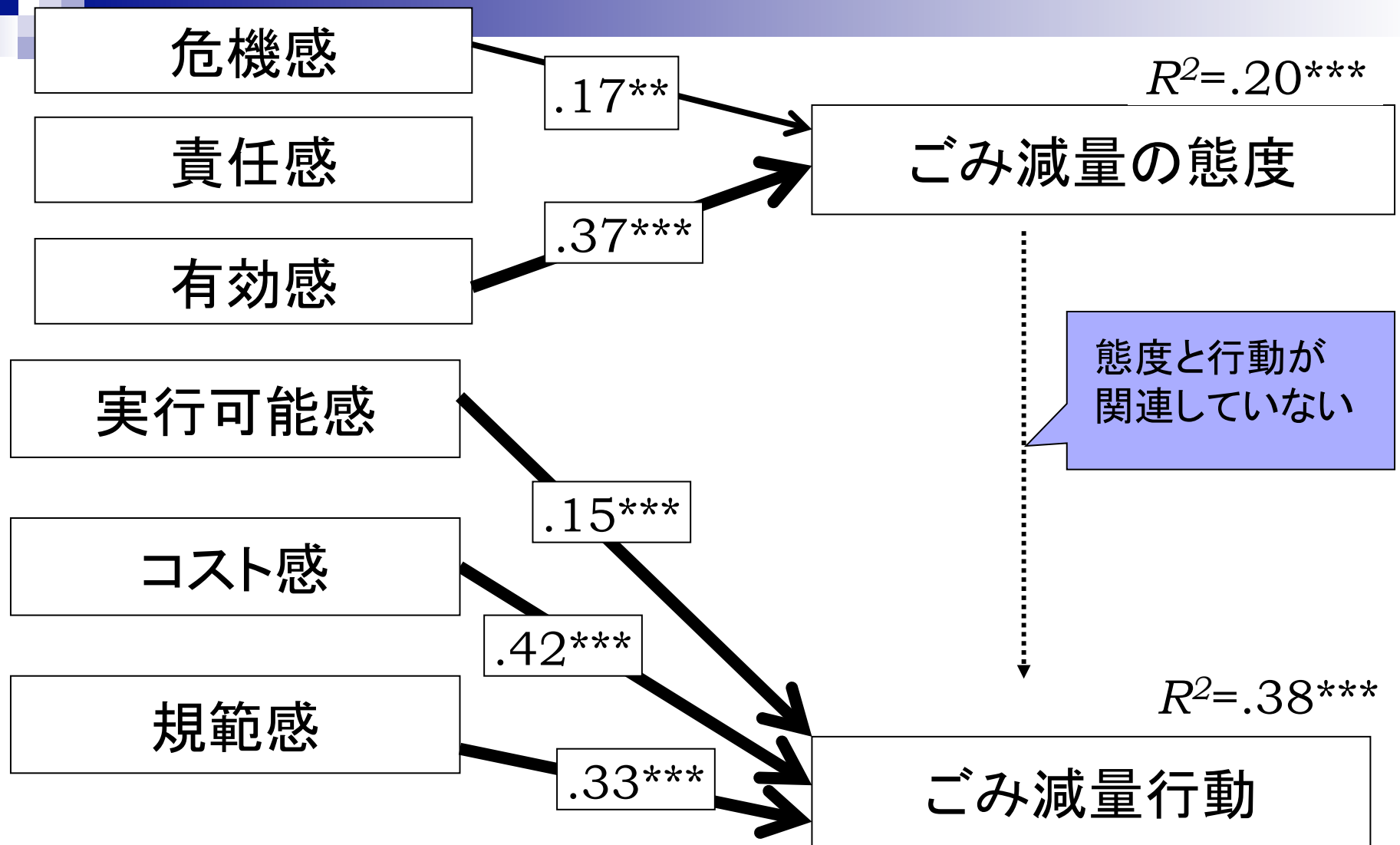


図2 環境に関する態度はしばしば行動を伴っていない

** , \rightarrow $p < .01$; *** , \rightarrow $p < .001$ 矢印上の値は標準偏回帰係数を示す。

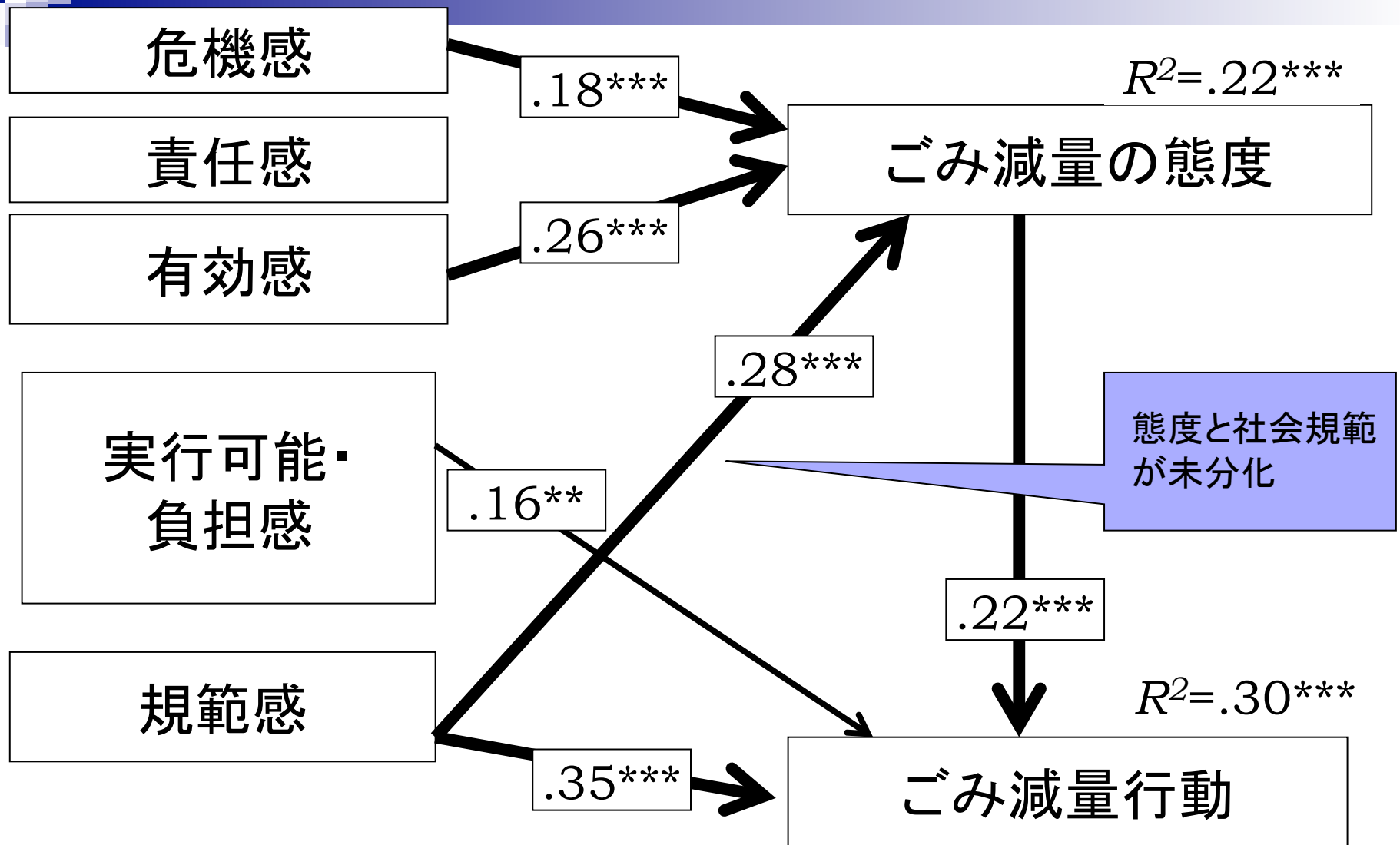




図2-1 子ども;ごみ減量行動の要因連関

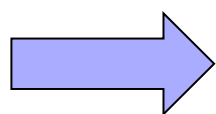
** , → $p < .01$; *** , → $p < .001$ 矢印上の値は標準偏回帰係数を示す。



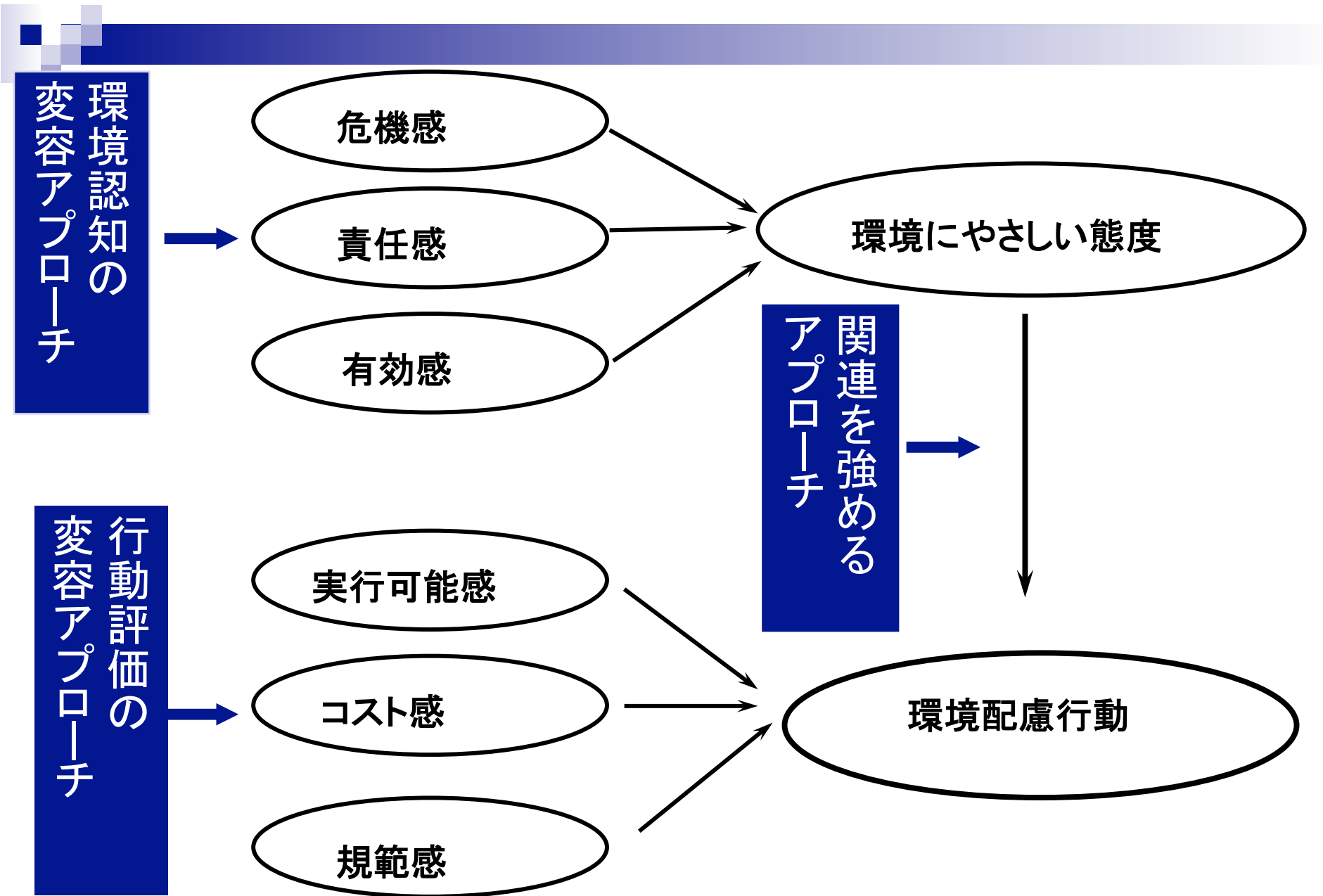
環境配慮行動の非意図的側面

- ついつい・・・、あまり意識しないで・・・という非配慮的行動は意図的でない
- 多くの消費行動は熟慮にもとづかない
- 非意図的な行動は、行動場面において自動的に生じる状況依存的決定
- 意識的判断でなく、ヒューリスティックな判断

- 
- 
- 環境配慮行動をとるようにはたらきかけるためにはどうすればいいのか？



これも2段階モデルから考えて
みよう



環境配慮行動を普及するため3つのアプローチ

環境行動を促す3つのアプローチ

- **エコライフの意識を育てるアプローチ**
マスメディア・口コミなどで情報を提供する
でも、意識は変わっても行動までは変わらない
- **エコ意識と消費行動の絆を強めるアプローチ**
自分の態度や行動を熟慮し反省する機会を提供する
エコ意識に一致した行動が永続きする効果がある
- **環境配慮行動のバリアを取り除くアプローチ**
配慮行動に必要な具体的ノウハウを提供する
努力に応じた報酬をわかりやすくフィードバックする
まわりの人々からの期待や規範を明示する